普段着のわたしたち

先日、小学校の入学説明会がありました。シューズケース、体育館用シューズケース、給食用巾着数枚、体操服入れ巾着、手提げカバンなど、いろいろ必要なものがあるようです。

勢いで、お友達の分も引き受けてしまいました。

着物のリメイクに比べれば、平面四角な巾着など容易いもの。

「よっ！巾着作り職人」と自分を盛り上げてミシン踏む！踏む！踏む！

夜な夜な作成を続けています。

訶梨帝母

新年早々に右折車に突っ込まれて事故にあいました。ついていないです。

厄年ではないのですが・・・

愛車はあえなく廃車に。

悲しいです。　征阿

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

人生初の入院生活。新しい病棟です。4名の大部屋で以前より広いです。トイレは10名程に一つの割合で各病棟のフロアーに何か所も個室の洋式トイレが点在しています。ですから各部屋の隣にあり、点滴の管につながれている身にとっては近くてありがたいです。トイレは個室ですので男性も女性も使用します。ですから、「男性も小を足す際は座って行ってください」と注意書きがあります。これが世のオッチャンたちはなかなか実行できず、相変わらず使用後も便座をあげたままです。だから家庭でも「汚い」とか若い人に言われてしまうのでしょうか。座ってすればトイレ掃除の人も助かりますし、下着を汚す確率も減るでしょう。家庭のトイレも含め、立ってする男性トイレは今後益々減少するでしょう。今の若い世代は子供の時から座ってするように教えられているそうです。立ってするという固定観念を捨て順応していくのも「人類の進化」です。化石にならないようにしましょう。

俊徳丸

新型コロナウィルスによる肺炎を巡る問題で、マスクも消毒薬も薬局から姿を消しましたが、口に入れても安心な除菌消臭剤を手に入れました。「ジアマックス」と打ち込んで検索してみてください。　迷走坊

こもりうた62

ここ数ヶ月、「小学生向け教材」の案内がいたる企業から送られてきます。最初のうちは物珍しく、チラチラ目を通していましたが、あまりに度々送られてくるので飽きてきて「ふーん、ポイッ」という有様。そんな中、時代を感じさせる内容がありました。

「新一年生の皆様、今、教材のお申し込みを頂くとタブレットをプレゼント！」なる広告。文字の練習、習得に便利。チャッと書いてチャッと消せる。意味も即検索等々華々しい機能満載。

恐ろしや～あら恐ろしや。そんな便利なモノで本当に覚えられるのか。

今は昔、我々の時代は「ノートに十回ずつ書きましょう」という宿題が出され、うんざりしながら書きまくり、言葉の意味は辞書のページがヨレヨレになるまでたぐったものです。あの地味な作業の積み重ねは、習得するのに必須であったと強く信じています。

二十年程前から出回った電子辞書に始まり、今はスマホでいつでも何でもサクッと調べられます。しかし、電源を落とし光の文字が消えた時、頭からも消え、「コレ、先日も調べたような…」なんて事がざらにあります。

二十代の頃、地図片手に友人達とドライブに行きました。不思議と一度行った場所は確実に記憶に残りました。カーナビが普及し、その便利さに頼って出かけた場所は、三度行き、また四度目もナビっている摩訶不思議。同様の理由で電子書籍なるものも手が出ません。

「液晶画面に浮かぶ光の文字は電源を切ると頭からもパッと消える。紙に印字された文字しか記憶に残らない」と同年の友に話すと、「アナログの時代、我らは若く冴えていた。電子化が進んできた頃、ぼつぼつ記憶力も下り坂のお年頃。時代の変遷と丁度その時期が重なった、という解釈もできるのでは？」と言われ、妙に納得。そして自信喪失。

これから就学する彼らがどんな方法で学び、その結果どうなっていくのか。何を記憶に残し、将来どう思うのか、興味深いところです。

が、とりあえず、愚息の部屋の棚には「電子ではない辞書や本」を嫌がられるほど並べてやろうと目論んでいます。

「紙にインク」の力を信じているのは私だけでしょうか。年代ゆえでしょうか。若人よ、教えてたもれ。

訶梨帝母

カエルを食べてしまえ！

アメリカで最も有名なビジネス・コンサルタントの１人であり講演者であるブライアン・トレーシー氏が 2002 年に出版したロングセラー本の題名です（EAT THAT FROG!）。

朝一番にカエルを食べれば、その日の最悪事はもう終わったと安心して過ごすことができる。このカエルとは、どうでも良いことではなく、最も難しく重要な仕事で、一番厄介なところから片付けなさいと勧めています。

アングロ・サクソンはフランス人を揶揄して"Frog eater"（カエルを食べるやつ）と呼びます。「あんな気味の悪いものをよく食べるな」と呆れかえっているからでしょう。

やりたくないと避けていても、何時か必ずやるしかない巡り合せになることが世の常です。

字が下手だった私は、小学１年生の時に書道教室へ通わせられました。遊ぶ方が面白かったから、暫くして止めてしまいました。

母は気に入らなかったのでしょう、それ以来、事あるごとに「お父さんは字が上手なのに、お前の字は汚い」と何度言われたことか。子どもに劣等感を植え付け、いじけさせたかったら、このようにするのが最も効果的です。

試験では、難しい問題は後回しにして、易しい方から、しかも早く書くことが良い点を取るための方法だと教えられ、私の字は益々がさつになっていきました。

長じて、漢字もひらがなも書かなくて良い道へ進みました。フランスへ留学したのです。試験も宿題もアルファベットだけで OK。レポートや論文はタイプアップして提出する決まりでした。

職場では日本語を書く必要がでてきましたが、美しい文字かどうか、フランス人に解るはずがありません。

帰国後もず～ッとフランス系の職場でした。

そんな私が親父の勧めにしたがって出家し、本山で修行することになりました。受付で目にしたのが御朱印の見本。「見たことあるな」と思ったら親父の筆跡。「あっちゃ～、お坊さんは筆で字を書かないといけない！」

この時心を入れ替えて、坊さんを辞めるか習字の稽古をするかしておけば良かった。

塔婆や位牌に戒名を書くと、人々がそこへ向かって手を合わせて拝まれます。だから誰でも読めるような字を書かなければいけません。時間をかけても構わない。読んでもらいたいという気持ちを込めて書くのです。それも生きたカエルを食べる気持ではなく、フランス料理のカエルを味わう気分で。

カエルのプロヴァンス風（Cuisses de grenouilles à la provençale）はエスカルゴ（カタツムリ）と並ぶフランス料理のエンブレムと呼ばれる繊細な味です。

迷走坊

『私説法然伝』（６２）

六道を見た⑥

先月号では平家一門の壇ノ浦の戦いの後の出来事について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【頼朝は平家方の男子を族滅させる事に執念を燃やした。しかしそれは後に自らの源氏そのものの滅亡の序曲でもあった。

平家との戦争における最大の功労者は弟の義経である事が頼朝には非常に面白くないことであった。冷徹な政治家である頼朝は私情から面白くないと思うのではなく、自身の配下である鎌倉武士が得られるはずであった武功が義経のものとなったからである。それが武士の不満となり、その不満は自分自身へと向けられるのがわかっていたからである。義経自身は自身の武功の大きさを理解していたのであろう、もはや彼の内面は鎌倉ではなく「中央」へと向いていた。その義経を最大限利用し、手中に収めたかったのが後白河帝である。老獪を極めた後白河帝は義経をかつての「平家」の如く取り立てていくのである。そして平家方の事務方トップとも言えた平時忠の娘を妻とした事で頼朝の不信感と焦りは頂点に達したのは容易に想像できる。頼朝の忠臣であった梶原景時は平家との戦争において義経の補佐であったが、景時の意見を義経は無視していた。それもまた頼朝の不評を買い、義経と頼朝は完全に対立構造となった。そして義経は所領を没収され、追っ手から逃れ、奥州へと落ち延び滅ぼされる。鎌倉武士による軍事政権は平家とは違い、あくまで関東土着の武士達の集合体であり、その武士というものの存在を無視して成り立つものではなかった。頼朝は源氏の棟梁ではあったが、源氏の棟梁であるだけで鎌倉軍事政権は成り立たないのである。恩賞を与えねば、その不満は必ず鎌倉へと向けられるのである。平家の如く朝廷の中において権勢を振るい、貿易によって富を蓄え政治を行うという政権構造ではなかった。あくまで「土地」に基づく武士達の支持なくしては政権運営が出来ない構造になったのである。頼朝は義経を滅ぼす、また奥州に独自の政権を持っていた奥州藤原氏を族滅させる事により、日本の大部分の事実上の支配権を握る事に成功した。平家崩壊後に始まったのは、頼朝と義経という源氏の中での争いではなかったのである。】

以下次号に続く（征阿）

義経最期の地とされる衣川館跡に建立された高舘義経堂

続・観経物語（９）

観経要讃

八、波いと高き心水に
廣大寛平暎徹の
浄き寶地の正厳を
浮べ仰ぎて領納す

要讃の第八は水の想を為せという章段でありながら、浄き寶地という地平を思い浮かべながら為しなさいと言われています。観経の教えで確認してみましょう。観経の釈尊のお言葉では、「次には、水の観想をするがよい。水の澄みきっている有り様を見て、これを明確に思い浮かべ注意して散らないように心掛けなさい。水をよく見終わったならば、次には氷の観想を思い浮かべなさい。氷の透き通った有り様を見たならば、こんどは瑠璃の観想をせよ。この観想ができたならば、次には瑠璃で出来た大地が内も外も透き通っている有り様を見るようにしなさい～」とあります。

水想を明了に徹すれば透明な大地を見ることに為るのです。水想を為すということは、人間の心の模様を明了に写し出して見ることから始まります。水面が波打ちざわついているのに気づかされます。これが衆生の心の表象なのです。ここで深く懺悔しなければならないとの心を起こすことになるはずです。要讃では「波いと高き心水に」とあります。懺悔の心を保ったまま、水面を見透し続ければ、清く透明で水平な面が推測でき広さも推量できるでしょう。それができたら、さらにその面が氷であると判断するならば、それが固い大地であることが解るでしょう。要讃では「廣大寛平暎徹の」とあるところです。さらに氷の大地が瑠璃でできた大地であるとの想いをするならば。水や氷に見えた水面が瑠璃の大地であることが解ります。究極のところ水、氷、瑠璃が一体であり、阿弥陀佛の在わします極楽浄土の透明な大地を見ることになるのです。要讃では「浄き寶地の正厳を」とあるところです。そして我々凡夫には何も見えないのではないかと思われたものが水面を注視することから浄土の大地を推量できるようになるというのです。また観経では続きがあって、「瑠璃でできた大地～その下には～黄金の幢があり瑠璃の大地を支えている。～この大地の上には、黄金の縄が縦横に交錯して張り巡らされているが、～高台の上には幾千幾万の楼閣があり～」とありますが、これらは何のために説かれているのでしょうか。これらは光輝き大地を支えていることを強調されていることから解るように、阿弥陀佛の衆生を救い取らねばならないという慈悲の心が浄土の大地を支えていることの象徴であり、黄金の輝きは本来凡夫には見ることができないと言うことを示唆しながらも、佛の方便により水想を成していくなかで明確に見ることに行き着くのですが、私たち未来の凡夫はこれを聞いて極楽の大地が浄いことを知れば良いのです。要讃では、ここのところを「浮べ仰ぎて領納す」と簡潔に述べておられるのです。

《妙星斎》